

No. 99

すくらむ

2023.3.1 発行



福井県特別支援教育センターは、県立病院関連四機関の4階にあります。

P.1

巻頭言

「多様であることを強みとして」

P.2

・第6回 吃音のある子どもをもつ

保護者座談会 報告

・市町の特別支援教育指導員・専門員さんへの
インタビュー

P.3

・特別支援教育コーディネーター養成研修

校内研修紹介

・センター的機能情報交換会 報告

P.4

・国立特別支援教育総合研究所主催

令和4年度発達障がい教育実践セミナー報告

・実践研究発表会の報告

巻頭言 「多様であることを強みとして」

福井大学教育学部 講師

南雲 敏秀 氏

教育の現場に足を運ぶと、子どもたちはもとより、かかわり手である私たちもまた多様であることに気づかされます。担任教師とともに、支援員や日本語指導員の方が子どもたちとかかわることもあれば、医療や福祉とのかかわりの深い子どもたちのために、看護師や各療法士の方が教室等を訪れ、ケアを行うこともあります。SCやSSWの方の仕事に触れることも増えました。多様な子どもたち一人一人の学びを支えるために、多様である私たちには、互いの専門性や分野を越えて協働することが求められていますが、このことについて、私が特別支援学校に勤務していたときに出会った、濃厚な医療的ケアを必要とするハルくんとかかわり合いを通して考えたいと思います。



ハルくんは気管切開をしており、気管切開部から痰が頻回に排出されるため、看護師が授業に入り、ケアを行うことがありました。当初は、ハルくんの気持ちやペースを大切にしたい教師と、何よりも安全にケアを行いたい看護師との間で意見が食い違っていました。互いの専門性や仕事を理解し合えない状況だったのです。しかし、ハルくんの姿を共通言語とした継続的な対話を通して、互いの仕事や専門性を理解し合い、その状況は徐々に変化していきました。看護師は、教師が汲み取った健康状態等に関する情報をもとに、より安全なケアを行えるようになり、教師は、ハルくんの気持ちやペースを大切にケアを行う看護師を支えられ、ハルくんとの間でより細やかなやりとりを行えるようになりました。ハルくん自身も、教師だけでなく看護師に対しても自分の気持ちを伝え、ケアにも向かうようになり、結果として、安心安全でありながら、より豊かなやりとりが展開するケアが実現していきました。

互いの専門性や分野を越えて協働するとは、個々が専門性を発揮するだけでなく、互いの専門性が十分に発揮されるように仕事をするということであると言えるでしょう。当初の教師と看護師のように、個々が専門性を発揮するだけでは、その仕事は分業的になりかねません。そうではなく、私たちには、多様であるからこそのかかわり、多様であることを強みとしたかかわりを行うことが求められています。

第6回 吃音のある子どもをもつ保護者座談会

令和4年11月12日(土)開催

第6回となる今年は、講師として3年ぶりに関西外国語大学短期大学部 准教授の堅田 利明 先生をお招きして、対面での講演を開催することができました。

第一部は、「吃音の悪化を予防する・悪化してしまった吃音を引き戻す」というテーマで堅田先生よりご講演いただきました。第二部は、5、6名のグループに分かれ、日ごろの悩みなどを意見交換し、保護者同士の交流を図りました。また、今年は県内の言語聴覚士さんが、オブザーバーとして座談会に参加しました。参加者の声を一部紹介します！



■保護者の声

- ・堅田先生から、吃音について細かい部分まで分かりやすくお話しいただき、「周りに理解してもらう」ことが本当に大切で、そのために本人とも話して合っていく必要があると改めて思いました。
- ・我が子だけでなく、同じ吃音のある子(仲間)がいるんだなと思い、心強く思いました。吃音があっても、「そのまま話していいんだよ」と子どもに伝えようと思います。
- ・堅田先生の話聞き、改めて子どもとしっかり向き合っていこうと思いました。
- ・今後の子どもとのかかわり方を再確認できました。つい「大丈夫？」と言ってしまうので、気を付けていきたいです。



■言語聴覚士さんの声

- ・保護者の方の生の声を聞くことができ、大変勉強になりました。グループセッションの時間が足りないくらいでした。
- ・“大丈夫”といった言葉の使い方や、患者様との関係を改めて考えようと思いました。

市町の特別支援教育指導員・専門員さんへのインタビュー！

近年、いくつかの市や町では特別支援教育指導員・専門員が、特別支援教育の発展のためにご尽力されています。今回は三人の方にインタビューしました。



坂井市教育委員会
特別支援教育指導員
西尾 文昭 先生

令和4年度より勤務。就学相談における地域の先生方の負担軽減や、各学校の特別支援教育体制づくり、体制の確認などの役割を担っています。坂井地区は特別支援学級の先生方の尽力により、交流及び共同学習や合理的配慮の検討などについて、通常学級の先生方も当たり前のように取り組んできていることを感じています。今後、通級による指導に関するサポートや、個別の指導計画・教育支援計画の中身の充実に向けた取組を行っていきたいと考えています。

令和3年度より勤務。就学相談における地域の先生方の負担軽減や、特別支援教育へのニーズの高まりを受けて役職が設置されたと考えています。特別支援教育がスタートして十数年たちましたが、就学相談や通級・特学担当者へのサポートなどを行っていく中で、特別支援教育が生徒指導や教育相談と並び、学校全体のものとなってきていることを感じています。特別支援教育のさらなる推進に向けて、学校の先生方の身近な存在として一緒に考えていけるようにしたいです。



あわら市教育委員会
特別支援教育指導員
森川 美恵子 先生



越前町教育委員会
特別支援教育専門員
宮崎 直美 先生

令和4年度より勤務。気がかりな児童生徒の増加に伴い、学級経営や校内特別支援体制づくり、就学相談における調査、教員研修等の協力をさせていただいています。また、特学の訪問を定期的にさせていただく中で、先生方の授業から改めて学ぶところがたくさんあり心強く思うのと同時に、自分もさらに研鑽を積み重ねたいと感じています。今後は、他地区の専門員の方や関係機関とさらに連携し、町の教員研修に力を入れたいと考えています。

特別支援教育コーディネーター養成研修 校内研修紹介

Aこども園 研修テーマ「気がかりな子どもの理解と支援」

Aこども園では、現職教育で「読み書きの力をつけるために幼児期に取り組みたいこと」について学び、基礎知識をふまえた上で、事例検討を行いました。事例検討では、年長児のふくいっ子ファイルをもとに、その子どもについて理解し、どんな支援を行うとよいか、小学校入学までにできることは何かをペアで話し合いました。支援については、「聞くことが苦手だから、一斉指示の際は個別に声をかける」「よいところを見つけて褒めたり、成功体験を増やしたりする」などの意見が出ました。普段から園児の実態について共有されているようで、どのペアからも有効な考えが出されました。

B小学校 研修テーマ「読み書きが苦手な子どもたちへの支援」

特コが捉えた校内のニーズから、研修内容を決めました。発達段階ごとに読み書きが苦手な子どもの陥りやすい状況や望まれる指導・支援、心理面の配慮などを学んだ後、実際にB小学校の事例で事例検討を行いました。先生方は、自身がこれまで行ってきた支援を出し合ったり講義を振り返ったりしながら、支援を話し合っていました。研修後のアンケートでは、「読み書きが苦手な児童の育ちと指導・支援の流れを理解して適切な目標を設定することが大切だと感じた」「他の先生の支援・配慮を知り参考になった」「心理面の配慮をしつつ、児童に合わせた支援と一緒に考えていく必要性を学んだ」などの感想が寄せられました。

C中学校 研修テーマ「発達障がい理解」

C中学校では、LD・ADHD・ASDそれぞれの状態像や支援例などの基礎知識を学んだあとに、演習として、事例検討を行いました。事例検討では、校内で使われているロイロノートを使って、その行動の背景や具体的な支援についてグループで考えました。支援については①本人に対してどんな支援や配慮が考えられるか②学級づくりの中で取り組めることは何か③校内体制はどのようにしていくとよいかの3つのポイントで考えていきました。「学習意欲が感じられないことはやる気の問題ではない」、「伝えたいことを視覚的に示すことが有効である」など、活発な意見交換がされました。

D高等学校 研修テーマ：「高校通級について」

次年度から高校通級の実施を検討しているD高等学校では、「高校通級について全教職員で共通理解を図る」という目的で、校内研修会が行われました。研修会の内容は、「高校通級の概要説明」「通級指導担当者による指導内容等の紹介」「事例検討会」の3本立てでした。事例検討会は、グループに分かれて行われました。教科担当教員や部活動担当教員が生徒の様子を語ったり、生徒の困り感に応じた支援のアイデアを出し合ったりしました。研修会後のアンケートには、「自立活動について少し理解することができた」「生徒について教員同士で話をする時間は普段から必要だと感じた」などの感想が寄せられました。

センター的機能情報交換会 報告

令和4年度センター的機能情報交換会では、県内特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが集合し、センター的機能に関する情報交換を行いました。前半は宮崎県のエリアサポート体制について、オンラインにて宮崎県教育庁特別支援教育課教育推進担当指導主事による概要の説明がありました。さらにチーフコーディネーターである宮崎県立みやざき中央支援学校指導教諭、みなみのかぜ支援学校教諭のお二人からは、宮崎県のエリアサポート体制における実践や、宮崎県の取組を紹介していただきました。後半のグループ協議では、教育相談の課題や悩み、工夫点などを共有することができました。また、特コの専門性の継承やスキル形成をどのように行っていくと

宮崎県のエリアサポート体制について

- ★宮崎県では障がい保健福祉圏域に応じて7つのエリアに分割し、幼保・小・中・高等学校等それぞれの校内支援体制の充実、およびそれらをつなぐ一貫した地域支援体制の構築をエリアごとに図っています。
- ★各エリアのチーフコーディネーターが、2～3か月に1回連絡会をもち、それぞれのエリアの相談状況を報告したり、悩んでいる事例について検討して意見をもらったりして連携を図っています。その後、自校のコーディネーターと情報を共有する、という体制が整っています。
- ★各エリアごとに、専門性の向上対象（特別支援教育を担当する教員対象）、指導力向上研修（通常の学級担任などですべての教職員対象）を行っています。

グループ協議で話題になったことをご紹介します

よいかということが話題に挙がりました。

他機関との連携で行っていること

- ★相談の中で、他機関等の連携が必要なケースだと判断したときは、担任や特コ、保護者に向けて望ましい連携機関を紹介し、機関の果たす役割や何のために必要かを説明する。
- ★福祉機関が企画している研修会や、福祉制度の説明会などの情報を提供する。

特学担任へのサポートの一例

- ★教材の紹介や使用方法について説明したり、実演したりして共有する。
- ★各校で特別支援教育の現職教育を行ったり、研修会のサポートを行ったりする。
- ★子どもとの関わり方や、学級経営、個別の教育支援計画作成の相談に応じる。

保護者支援について

- ★本人や保護者に進路先の正しい情報を提供したり、情報共有のサポートを行ったりする。
- ★個別の教育支援計画の作成に関する相談や、家庭での取組についてのアドバイスを行う。
- ★クラス替えや就学先への移行支援に向けて、引き継ぐ内容を保護者や担任と整理したり、移行支援シートの作成の協力をしたりする。

令和4年度 発達障害教育実践セミナー報告

文部科学省から今年度、特別支援教育を担う教師の研修等の指針など、数々の通知が出され、さらに通常の学級に在籍する発達障がいの可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果が公表されました。これらのことを受け、本年度の当該実践セミナーでは、全国教育委員会や教育センター関係者を対象に、「通常の学級における発達障がい教育の充実に向けた展望と人材育成」について、パネルディスカッションと1道1県の取組紹介が行われました。パネラーや発表者の発言の中から、発達障がい教育の充実に向けた大事なポイントとなるキーワードや内容を以下にご紹介します。

子どもの困難さには目を向けやすいが、困難さの背景やできること・効果があつた支援を通して的確に実態把握をする。授業のUDは、how to(シンプルな掲示板・板書の構造化など)が定着してきたが、改めてUDの目的を問い直し、支援や配慮が必要な子どもの授業中の変容を通してUDを意味づけ価値づけていく。特コの日々の仕事は大変多い、管理職がその仕事や役割分担を明確にする。特別支援教育を学ぶ校内研修を校内に位置づけ、知識習得型と自校の事例をもとに学びを深めるスタイルの研修を適切に組み合わせる など。当センターは先生方のさらなる資質向上や人材育成に向け、特コや新特担の研修、研修講座の開催に加え、校内研修の協力も行っています。積極的にご活用ください。

実践研究発表会の報告

令和5年2月7日(火)実践研究発表会を開催しました。当センターと参加者を遠隔システム(Microsoft Teams)でつないでの実施は、3年目となりました。今年度も、園、学校、関係機関など100名を超える方々のご参加をいただきました。当日は、特別なニーズのある子どもを支えるための連携や協働を通じた取組について、6つの実践報告をしていただきました。参加者からチャットで様々な質問や意見を募り、発表者にお答えいただきました。最後に、福井大学連合教職大学院の荒木 良子氏、笹原 未来氏、小嵐 恵子氏、南雲 敏秀氏からご高評をいただきました。

参加者の声

【福井市国見小学校】

特別支援の児童を支える取組

「子どもたちに寄り添った先生の取組がとても参考になった」「学校全体で子どもを支える環境が素晴らしい」

【福井市安居中学校】

不登校の生徒を支える取組

「特コとして、自分から子どもや関係者とつながること、寄り添うことの大切さに改めて気づくことができた」

【特別支援教育センター】

吃音のある子どもを支える取組

「吃音そのものに対する理解と、吃音をもつ子どもの理解をし、支援体制を整えることの大切さを強く感じた」

【NPO法人はるもにあ

福井市発達障がい相談支援事業所】

就労支援の取組

「関係機関が協働して支援を行う実例の詳細を聞くことができ、大変参考になった」

【清水特別支援学校】

特別支援学校のセンター的機能を果たすための取組

「センター的機能の充実のために、校内研修をとおして専門性の向上に繋げている継続的な取組がとても参考になった」

これからの教育や社会は多様な対応が必要なので、色々な考えを出し合えるチームでのかかわりが大切だと思った。

【若狭東高等学校・嶺南西特別支援学校】

肢体不自由の生徒への校内支援と高校通級の取組

「肢体不自由の生徒の通級の実践が興味深かった。校内支援体制や移行支援の充実が、非常に大切であることを改めて感じた」

センターだより

すくらむ 第99号

発行日 令和5年3月1日
発行所 福井県特別支援教育センター
所在地 〒910-0846
福井市四ツ井2丁目8-1
TEL (0776)53-6574
FAX (0776) 52-6272

E-mail tokuse@pref.fukui.lg.jp
URL <http://www.fukuisec.ed.jp>

オンライン開催なので、校内で複数の教員と視聴することができ、専門性の向上に役立った。